



13
204
4



北極

宿備をぞびりしめけり

第六編

孝子耕田して孝義を表せ
勇夫山獵して邪惡を除く

六
104
4

東

風間八郎正國ハ山塞毎逃還リ兄次郎に小栗ヲ狩ルル事ニ入レテ次郎
大ニ怒リ我々下ノ者ハ渾我ヲ殺ス身ヲ寄ルルもの其のどのもの其の
討テテそのまに知を教せんこと丈夫の所為るる強小栗ハ鬼神
あも雨れ此仇ヲ報リてやりと俄に下ノ城ヲ催し小栗ヲ夜討シて
既ニ手配ヲ定メテ其れども小栗が光景ヲ知ルル悪クハ人
を多クに内討シて忽ち走返りて中ノ所ハ小栗ハ今宵八郎との次郎
付ひのふくを彼を旅奔せし居りと報る也次郎ハ其のいさしに押
まて討られし手下の賊数百人ヲ將て山ヲ下リ身ヲ其後の方よりまきし

八郎正國

十三

Yamabe
Yamabe
子

小栗へ勝岡が揚兵をよめる本陣も還る風間兄弟を拘執となりて
 小栗が前々幸居られり其府判官代助重兄弟の御と解免し
 外生捕らる小賊ありゆし皆酒食をよめて親せき食せし其後風間
 兄弟が對ひ我昨日八郎を擒せしれよく教訓を還ししゆゆ
 今夜もりて備えたりこれ何のふぢも汝もいふあとも天罰を
 逃れんやゆを將し正民も帰るとも賢れりされ八郎あはるて衣
 食の地をばびるはとありなれ風間兄弟涙を流し我く純て人まる
 道と先ひが悪行しける悪しとて悔もて再ひしを免と蒙る西已
 うのりがたは教訓を賜て生歸恩らう忘れなむん今日よりゆ
 改め君の臣となりてつらる賤き業をもし九牛が一毛の恩に報ひ
 きん然ら此事叶じもひまんやと生實入ておまきんゆる助ま

毒ひ実ふその志意を改め我又汝が望とかき入はるまじさるやとも
 汝も骨柄忠信のりのことゆそもらうる人のあまかくの今もはは
 はくまど身のうを結りゆとめら風間兄弟謹むやけれ我くは
 素よりの賊よめらに元武義國多摩川の辺れりゆ初りて母
 後且父の養育にゆて人とらり兄の十五才の十四才といふ年諸國
 群盜蜂起し未も御も賊も侵され父の城のあも殺されぬ家も兄弟
 父の能を頼んと生城も從ひはけ給らふとゆと賊將我心嚴はて便宜
 を好とてま心なすしはらる其城の棟梁南國流波山も移り信んと
 せしに前々強盜ありてこれと申我く兄弟夜よもぎれ流波山の山寨
 小忍び入りて強盜の首とり棟梁の賊もあへるが限りさく毒ひこれ
 より側近く居ること免されりこもあはて兄弟をよることを合し終り其



筑波山の藤
助重屋間
兄弟を伏せ

栲梁の賊討ち。素懐と遠くじやぶ故にお還らむとせしむ下
 の小城亦栲梁の仇と報んとせむ。兄弟のものをわけて山寨の棟梁に
 冊をばふ詮をうく。今日まで緑林の首領とありしと天翁我くは
 多の君下を正し帰化せしめよとの誓しと涙おしぬぐひけ
 る。されば小栗さればこそさる孝子とて志も義勇熱ひなれんなり
 今日よりて我力も助けおしねと君臣くまの孟父兄弟の者も
 あも風分兄弟喜ぶことかまひの池庄平。庄司も助きの明を感
 した朋軍をほりしと故びの誓を信し。此風分兄弟も足す。新田
 十人の殿系の再生もしてこそ助重と君臣の義をば過去の因縁が
 結びより斯く小栗判官代助も檜川をうちならし居城多々氣の城に
 至る小城中城外の家人百姓も公達の事り多くと喜びまきとて迎らる。

判官代ハ城に入らん人心を安らさんと。府傳ある処の令銀承法を
 貧乏ののちろせむれむと土地は老少徳と貴。公達り日本國の
 君と仁徳地法の帝もまき。劣りして喜びぬふと涙のほまき
 又近國の強盗亦助きのもの風間兄弟も知つ居たり。のちまき
 逃く跡をかじ仁義と慕ふもの降参して素の正民お帰化せしむ。當國
 の中ハ盜賊絶てなく。夜といくと戸をぬらぬ。おぬらぬ。おぬらぬ。四民
 を其業をすん。國自ら富て民の寔も振ひぬ。小栗の此のゆふ
 公徳。く。い。ら。ん。其。光。景。を。え。や。と。考。村。と。称。一。城。外。も。知。て。農。家。の
 体た。く。を。荒。る。田。も。なく。増。は。さ。か。も。ん。後。公。理。お。喜
 る。四方。は。律。網。も。二月。の。こと。な。れ。ば。春。の。め。小。田。さ。か。入。り。と。世
 民。小。田。野。お。出。て。耕。し。る。こと。は。兄弟。と。お。ぼ。し。農。夫。と。あ。る。時。よ。て。午。饗。の

食臭すらひく味も居るあり。身とおがらりの味にして口はひくこと
客人と待遇ぐじし小栗達の岳よりこれと夢王着てあつく賞罰一賤さ
身もてきく人も及ぶれをあるその不思議さよ何れぬうのう人とその
と傍おけりなは村長お對ひ彼も何らうりのあて名を何とぞして同
それ村長道でやう彼も兄弟のりのもて又かき即とらひ言て加次郎
とやん彼が祝い加平ともいふ文流こととよし近辺あつた二つは臆物あて
賢い人と教ひいふ四つとも子もあつたやん神も佛も祈りて二人の子を
まらけきあつていつうがよく教導して艱苦をぬね彼もいふごとく幼なれ時
隣家あて餅を春なほを兄弟の子供をいふを家へ帰り隣家あつた
餅を春の何のあつた付くもやとて母も同あつた母哉とていふあつた味
せんぬぞりしとあつた加平これとて妻も戒めて云凡子と妊て席の正

なほ居るは割正なれ食ととま入らぬお兄弟の心と
あつたいを欺れ多ひけつと云愈し餅賣で二人の子も喰ひぬ又或時
兄弟して牆の壞れと修理まて地と掘ると教ふおと教すおと文の
錢のり加平が家素より寒家よりいふ兄弟喜ひ父母おと生り加平
守ておぼしめて云入りのあつた其道と勤めじて縁とゆつとあつた尚禍の根
ありして賢い人といと危ありまひてや故あつて賤とゆつた足亡るの
本あり我おいしていそ足と取収んやりと終おせ坎と埋したなりかどろ
歳よ教言はるやとあつた兄弟あつた父の教を守り世も曲る心はしその上
文道も長つるぬ然るも去年父母没命なれぬ兄弟悲しむはつた子あ
食ぬて五日形悴疲より小祥お及びても心の愁れ忘れぬ墓の傍も
序を結て三年まで居るぬや後家も還り生業と励え兄弟同居て

致をさると父母在時のどし目今と達のゆはつゝあつては生卒よる
 るゆふくとせへつれ小栗のあつて感賞我采邑のうちお斯らり賢人
 のありはるりのを今日まで知て過中この思ふよと加吉郎加次郎と
 めいそ金浪衣振とふへ其孝悌かして忠信あるとと賞し今より我は
 めんやと頼あはへんふは兄弟の小栗の仁恵を感佩し願するふ且賢君
 とんとつれは終ふ月と番て小栗の家臣となりり足もまご前世の因と
 せりてお田十人の忠臣再生とての奇偶して君臣とふなりみちり。小栗
 判官代助重の此国より二年むらりかたふ良老儀五人は好れんは
 喜かると限は不在話下再説義登小四郎は主人侍従照天の跡を慕ひ
 尋すゆふりしとて行船と知らざりしうふ今もやいふも詮とてまぐ一且
 常陸を下り。すもめれは彼ともよく後了。老も角もせんぞれとものをと。

常陸國ふりりれらふ義登小四郎も身お後若小今といふのあり。幼
 めれより後若何事よまられ其家と嗣ひて兄とおはく鳥光は仕へ忠臣を
 二のりのなりたるが兄小四郎義登を赴し後名武の城お残り笛りまき夜
 急つたよ城をとりけは一日城外開しかり程何事やらんと櫓お
 せり。は光景伏竊く人く云四つらふ高願を鳥光と相模川を渡死
 ありありあり。徳念の信願よりを采邑と没収あらんと。既に徳念の
 鼓を石のげれぬ然るよ近日此城へも討手向りんと必定向りこ
 城外の民家賊を東西に掃運しと鼎の沸うてく小女これとてよ
 致るれ今も逃るね秋より名武とほきて人も知りては名家かあふ
 此城をおめく腹さへ云甲斐なれり。おのれえつりともこの城を痛
 致付死せんと既よそのをん信を極めしが熟くよ主人お一人の理あり

掛銭
おん
鄭氏の
政を
思ふ

善と
いひこり
云々
五母の
教ふ

菊薫桂韻

玉潤金聲



菊薫桂韻

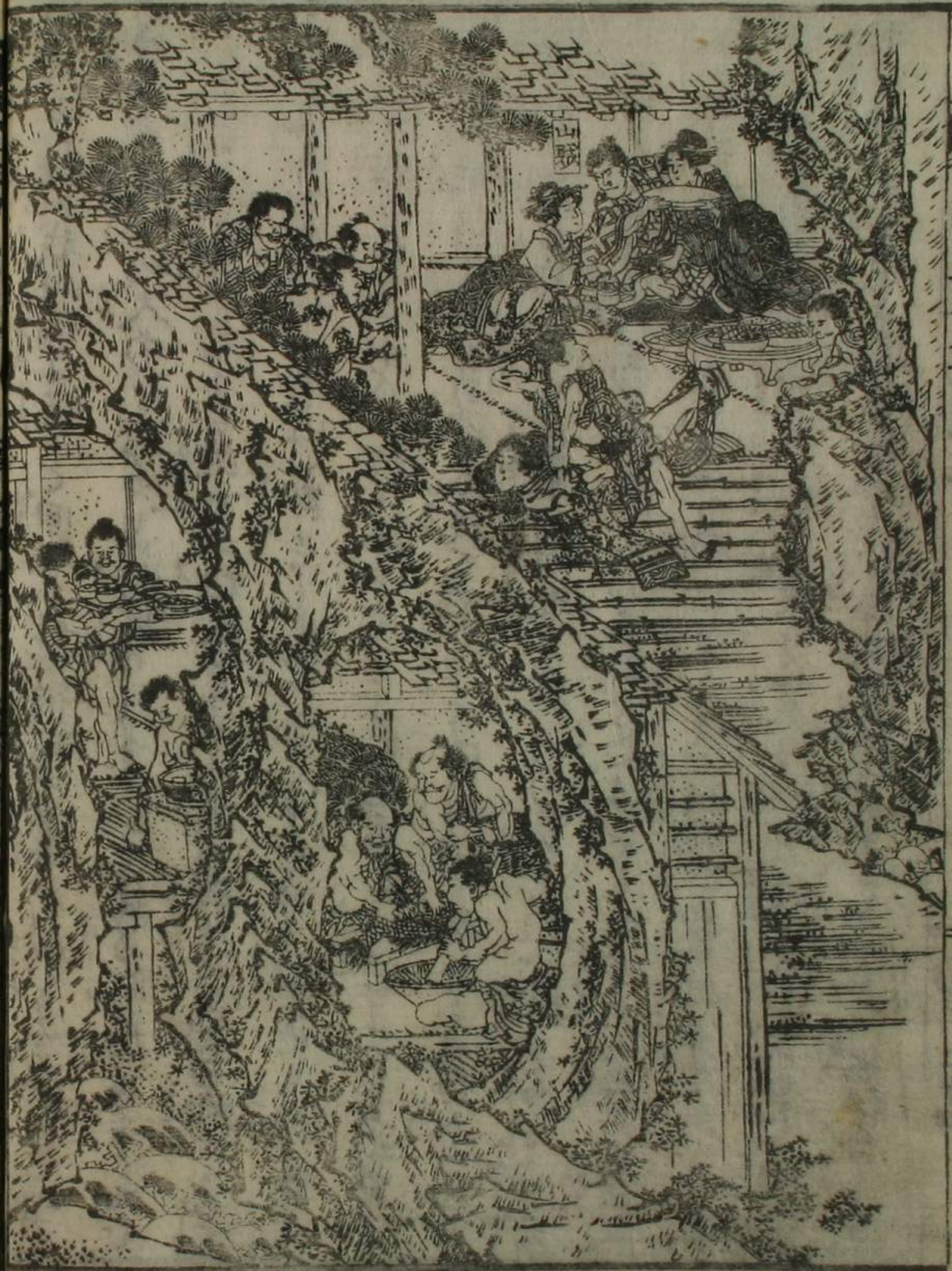
玉潤金聲

此眼のこととて愁訴せむとて名承のことなれぬ家名をうりの立えん
 のて勢のこととて其妨となりとらんは是不忠のゆかりと鬼角あり
 所小兄の小田郎還りまじり藤倉の許たふく洋ふ語りゆふと小ゆ
 致るれ我志事のほど云々こめれば小田郎も同志氣うれは見えなく
 紙を藤倉よりの上使と行て異様なく城を明渡し。是等の名武の城の
 片やうりや暫時忍び居るるれこれに養登小田郎一人の男見あり。
 名を小太郎と名と噂り又援成小助も是等の男子とりてり。是とて
 兵助助高といひしと大太郎高次とりり。此二人の少年才の才六ふ
 のまり大才早業の勇者なり。まゝより血属のことなるは常も親く睦ひ
 語らひる。そもく常陸國の山々く名武の城も山と近く。既小玉藤倉の
 龍かんとらぬ名承あり。されば小玉町も後成見身も平生山嶽く

樂ことせり。一日りものごとく。三つうち連玉藤倉の麓の下とて山は山口
 のちり。終日狩くじはる山何の獲物もあらず。公楽まどして既小
 家路も還らんともる。射しうかして小太郎後成見身を失ひ一人藤倉
 たらんとさるふ忽ちる失て穴程ふ墮り。これ口惜と知んとされど穴裡
 圍して出た方と知り後暫時居るし。漸やくやそりの明々く
 える方あり。さてはより出る道ありと見まはして追ひつきて谷間
 のあゆむ。そこにおひて少く公安塔と何方か麓なるを弁とて四方
 を徘徊て道を索るふ。一の細流あり。これよれりのをとんばるりのお此の
 流る方こそ麓ありとて岩辺ふ迫付るふ。いと清くうなる流るるふ
 なるがうち俄に朱に灌はれど赤れ水流れまをれば。これ不審と流
 の方とうち見せり。怪ひる清く数中かなは小女の血を染これ衣を濯

居る。小吉郎これを見て大きき小怪しき鳥も通るぬ山ふところ小女
 の居る心とほね正しく山鬼の類も我を騙る事とおぼえし。いで手
 捕りてくればつと小女が側小近寄れば小女よりかゝりて小吉郎を捉
 へておどろかし走らせんとせよと云ふ。小吉郎路をうけて引倒し足下踏
 入声とあつげ逃げぬれ妖物と明白なり。はしと苦悩するものなり。あち
 撃ち殺さばとあつてはあふ小女は我を懼れまじし回意なぐてあつた
 漸あつておどろくしりちるぬ奴家さうく妖物まじる南國を尋ね
 庄のりなるが今ま麻呂治とて途めて盗賊に出遭ひ此山は誘
 引する者なりとせよ。小吉郎豫て此山は強盗の窟とせよ。はしと
 する事とあつてはつとよと便なれと云ふ。おどろきて塵うちちりひび
 ゆり処実るゆりゆり子細ふよりては我れと助け申してはあふ還らまじ
 たる

山塞の光景と錯るべと同かくもば小女この山の強盗を流間次郎
 素の流間の盗賊のしりが便宜のつめ近は此山は後には手下の小賊
 三十人づつのもゆらん次郎は財宝を奪ふのこころに容き乗じた女子をも
 奪ひおのれがむら秘ひしとて妻とし。あつたさうとて京漢金も賣りしに
 それをもことごとく辞めりて斬殺しぬ。既よ今日も一人の女子を斬
 小袖を脱ぎしとて入るも身のあつたは方より山塞は又妻のこころ
 あつた逃れぬけ道の困るも。次郎は身のことより身のあつたは
 失ひすぬとて入るもことごとく去りて入るも。彼困道の光りみ
 出入りとも難しとて足より南の方に常く出入りする所あり。こころより進
 身入奴家道あるべしとて入るも。小太郎はこころより案内さへ海をも
 ぼんといふ小女はたれに志の喜とせよ。次郎去りては現を尋ねてこの



偽らぬを察し、まゝと実しやうお勘たされば。次郎うちせし少く疑ひの
 解しや。一回と相いひ。さうの再りのはるうその意ナレ。我此疵をい
 療治の方と云へ。と祖まてえとて。ふ肩の辺より腕にかけて。刀で
 斬まぬとおす。疵有り。小を郎熱くとうちて。より。うら。い。疵
 傷られ。さう。日。経。れ。れ。と。お。ほ。え。肉。腐。れ。紅。爛。し。り。此。腐。世。内。を。去。り。て。え。愈。ぐ。じ。あ。う。れ。れ。も。此。肉。が。去。ん。と。と。れ。れ。其。痛。強。く。尋。常。の。人。と。は。ば。へ。じ。と。い。ふ。次。郎。敷。れ。ぬ。と。露。知。ら。ば。その。云。所。実。も。さ。あ。り。ね。え。と。も。い。ひ。い。ふ。こ。の。良。醫。師。さ。り。け。り。と。い。は。し。い。は。い。う。も。さ。も。こ。こ。此。傷。を。愈。え。よ。と。と。ら。へ。ん。小。を。郎。は。さ。り。と。喜。び。棟。梁。の。尋。常。の。人。よ。お。い。さ。後。よく。痛。を。忍。び。め。り。ん。が。頑。く。酒。が。吞。熱。酔。い。も。さ。う。治。療。を。施。さ。す。よ。う。と。い。ふ。も。さ。ら。が。酒。を。吞。ん。と。大。杯。が。引。ら。け。て。續。け。吞。む。六。七。

盃の酒を吞り。妙耐るると酔し。ふも。さ。う。く。月。入。自。在。う。ら。ね。を。窺。ひ。白。布。と。い。ひ。瘡。傷。を。腕。と。巻。く。と。い。ふ。下。勿。心。ち。の。子。小。を。郎。に。綁。め。り。手。下。の。盗。人。も。こ。れ。を。着。て。慌。忙。き。を。掻。げ。む。小。太。郎。声。を。高。き。う。ち。て。さ。り。け。り。我。不。才。醫。師。よ。の。ら。ば。義。登。小。を。郎。為。久。と。い。ふ。武。夫。さ。り。今。日。此。山。が。狩。せ。し。は。獲。物。も。あ。ら。さ。し。は。ま。を。空。ち。り。て。還。ら。ん。と。さ。う。お。不。図。強。盜。の。巢。穴。を。吟。ひ。尋。は。し。ま。る。庶。様。の。代。に。此。棟。梁。を。生。捕。て。土。産。と。さ。る。所。を。右。支。ゆ。り。の。の。ら。ば。や。ん。此。次。郎。を。斬。殺。し。其。次。は。汝。も。殺。さ。し。又。神。妙。を。還。さ。し。な。ら。ば。汝。も。命。が。助。か。る。の。ら。う。次。郎。が。奮。然。と。貯。は。し。令。浪。賊。主。殊。り。る。く。陣。汝。を。さ。す。と。い。ふ。と。呼。び。た。れ。ば。ま。さ。の。強。欲。馬。合。の。次。郎。も。小。太。郎。が。勇。威。不。懼。れ。ま。さ。山。塞。の。財。宝。を。さ。り。と。い。ふ。欲。あ。ら。ま。れ。敵。對。者。

